

春のアブラゼミ 第11日目 that の用法

組 () 番号 () 氏名 ()

The very bigness of America has an importance in the formation of its tradition **that** it is not easy to overestimate. It creates the belief **that** America is different, is somehow exceptional, and **that** there is reserved for its citizens another destiny from **that** which is to befall the Old World.

下線部の there is がよく分からない子は、もう1度「春のアブラゼミ・第9日目」を読み直しなさいね！
安易に正解をのぞかないで、自力で答案を完成させてから、正解と見比べることでしょ！

和訳

参考

- ・ A is not easy to overestimate = 過大評価しにくい → 過大評価しすぎることはない
- ・ exceptional = 例外的な → 並外れている、普通ではない
- ・ another A from B = different A from B → Bとは違うA
- ・ befall A = Aに降りかかる、Aを襲う、Aに起こる

英文の読み方

1. 前置詞＋名詞は他の部分から切り分けて形容詞か副詞かを考える。
2. and、but、or が出てきたら直後に注目し、直前に同じ形を探す。
3. a、an、the が出てきたら名詞を探す。
4. 助動詞の後ろには動詞がある。be～to や～to を助動詞考えれば簡単に動詞が見つかる。
5. 文中副詞の後ろには(一般)動詞がある。文中副詞のほとんどが「-ly」の形をしている。
6. 文頭に前置詞＋名詞があり、その直後に動詞があれば、完全逆転型の倒置。
7. 文頭に否定語があり、直後が疑問文の並び方なら、疑問文型の倒置。
8. 省略は「同形反復」に注目すればすぐ分かる。
9. A of B が出てきたら「BがAする」「BをAする」「Bの持つA」「BというA」「AのB」を特定する。
10. that、-ing、to が出てきたら「名詞」「形容詞」「副詞」を特定する。、-ing のコンマ(,)の省略に注意。

注意点

今回は that の勉強です。問題文には4つの that が出てきます。それぞれ、どんな用法の that かを考えてみてください。あ、that の用法を忘れた子は、もう1度「ルール16」の復習が必要ですね。下の7つの英文を見て、that の用法が頭に浮かばなければ、勉強不足ですよ！

■ 僕らは彼がそこへ行ったことを信じている。(従属接続詞の that) [ことシリーズ]
We believe **that** he went there.

■ 僕らは彼がそこへ行ったという事実を信じている。(同格の that)
We believe the fact **that** he went there.

■ 僕には今日読む本が一冊もない。(関係代名詞の that)
I have no book **that** I can read today.

■ 僕はあなたに会えて嬉しい。(理由・原因の that) [なぜ？ どうして？ の that]
I am happy **that** I can see you.

■ 僕はとても疲れていてこれ以上歩けない。(結果・程度の that)
I am so tired **that** I can't walk any more.

■ 僕が愛しているのは君だ。(強調構文の that)
It is you **that** I love.

■ 彼がそこへ行くべきだという点で、僕らは合意した。(熟語の that)
We agree in **that** he should go there.

あ、それから、問題文中の A of B、the very bigness of America と the formation of its tradition が上手く訳せますか？

この英文のポイントは、that を見たときにそれが「名詞」、「形容詞」、「副詞」のどれなのかが判断できるかどうかです。

名詞の that には次の2つの用法があります。

<名詞を導く>

■僕らは彼がそこへ行ったことを信じている。(従属接続詞の that) [ことシリーズ]

We believe **that** he went there.

■僕らは彼がそこへ行ったという事実を信じている。(同格の that)

We believe **the fact that** he went there.

名詞の that の特徴は、2つとも that の後ろの文が「**完全文**」だということです。つまり、文の構成要素に欠けている部分がありません。例文の He went there は第1文型の完全文ですね。じゃあ、どこが違うのかというと、「ことシリーズ」は主語や目的語になるのですが、「同格」は直前の名詞を説明しています。つまり、同格の that + 文の直前には説明される名詞がないといけないわけです。例文では the fact がそれに当たります。他にも the idea や the belief が that の前に来ていたら「同格」じゃないかと考えて良いでしょう。そして、同格の訳語は「BというA」や「A、すなわちB」がピッタリとはまります。

▼彼がそこへ行ったこと

that he went there

▼彼がそこへ行った**という事実**

the fact that he went there

<形容詞を導く>

■これは父が僕に買ってくれた本です。(関係代名詞の that)

This is the book **that** Father bought for me.

関係代名詞の that は、直前の名詞の飾りがここから始まるよ！という記号です。だから、「関係代名詞 that + 文」は形容詞を導きます。2語以上の長い飾りですから当然飾られる名詞(先行詞)の後ろに来ます。関係代名詞の that の特徴は、that の後ろの文が「**不完全文**」だということです。つまり、文の構成要素がどこか欠けているわけです。例文では Father bought **it** for me の it が先行詞と同じだから、それが関係代名詞の that になって飾りの文の頭に出てきていますね。

<副詞を導く>

■僕はあなたに会えて嬉しい。(理由・原因の that) [なぜ? どうして? の that]

I am happy **that** I can see you.

■僕はとても疲れていてこれ以上歩けない。(結果・程度の that)

I am so tired **that** I can't walk any more.

副詞の that の特徴は文末副詞の位置にあることです。つまり、S V O C が全部出尽くしてから that が出てきます。特に、「なぜ? どうして? の that」は「人 is 感情の形容詞」の直後に来ます。また「結果・程度」の that は必ず so や such とセットになって「so ~ that . . .」や「such ~ that . . .」の型にはまっています。

<その他>

■僕が愛しているのは君だ。(強調構文の that)

It is you **that** I love.

■彼がそこへ行くべき点で、僕らは合意した。(熟語の that)

We agree in **that** he should go there.

強調構文の that は「It is 強調 + that 残り」の型にはまっていますし、熟語の that は「in that ~」「except that ~」の2つだけですから簡単ですね。

さて、問題文の最初の that ですが、最初の that は直後の文が「**不完全文**」ですね。

▼その重要性を評価してもし過ぎることはない。

It is not easy to overestimate **the importance**.

ということは、この that は「関係代名詞の that」だと分かります。でも、注意すべきことは、in the formation of its tradition の「前置詞 + 名詞」が割り込んでいて、先行詞と関係代名詞 that とが離れてしまっていることです。だから、安易に「アメリカの伝統を過大評価する」としないこと！

次に、2つ目の that ですが、直前に the belief があって、that 以下がそれを説明していますね。そして「BというA」の訳語がピッタリ当てはまります。

▼アメリカがとても大きな国であることは、アメリカは他国とは違う**という**信念を生み出す。

It creates **the belief that** America is different.

ということは、この that は「同格の that」だと分かります。

3つ目の that ですが、これは「and, but, or が出てきたら、直後に注目して直前に同じ形(機能)を探せ」というルールを使えば簡単に分かります。だって、and の直後には問題の that、直前にはさっきやった「同格の that」があるわけですから、これも「同格の that」に決まっています。

最後に、4つ目の that ですが、もしかするとこれが一番難しいと思っている人が多いのではないかと思います。実はこれは「あれ」「これ」「それ」の指示代名詞の that で、中学の時に習ったやつです。もし another が different とほぼ同じ意味だと知っていたら different A from B と同じ表現であることに気がついたはずですよ。

▼それとは違った運命

another destiny from that

もう1つのポイントは下線部の「完全逆転型の倒置」です。これは見取り図の方で詳説します。

<見取り図>

The very bigness of America has an importance in the formation of its tradition that it is not easy to overestimate.

The very bigness of America	has	an importance	in the formation of its tradition
主	持つ	何を	

that it is not easy to overestimate ×

- * the very bigness of America は「アメリカの巨大さ」ではなく「アメリカが非常に大きな国であること」とやってやる。なぜなら、この A of B は「主格の of」で「BがAする」なのだから。
- * that の先行詞が tradition ではなくて importance であることに注意。
- * the formation of its tradition も「アメリカの伝統の構造」なんてやってはダメ！ form は他動詞で「形成する」だから、この A of B は「BをAする」の目的格だと分かるので「アメリカの伝統を形成する」と訳出する。英語が「する・させる」の言語、日本語が「なる・される」の言語であることを考えると、「アメリカの伝統が形成される中で」がベスト。

【全訳例】アメリカの伝統を形成する中で、アメリカが巨大であることには、高く評価してもし過ぎることのない重要性がある。

It creates the belief that America is different, is somehow exceptional, that there is reserved for its citizens another destiny from that which is to befall the Old World.

It	creates	the belief
[=The very bigness of America]	生み出す	何を
主		

{ that America is different
 = is somehow exceptional
 and
 that another destiny from that is reserved there
 for its citizens
which is to befall the Old World

- * It は主語なのだから、前文の主語を先ず代入してみる。そして、この段落のテーマが「アメリカが巨大な国であること」に気がつけば、it と代名詞化されていることに納得できるはず。
- * , is somehow exceptional, は「コンマ-コンマの挿入」で、同格的に用いられている。つまり、著者は America is different (アメリカは他国と違う) と言っておいて、それだけでは不十分だと考えたので、is somehow exceptional を挿入したわけだ。
- * befall A で「Aに降りかかる、Aを襲う、Aに起こる」
- * the Old World は新大陸発見時のヨーロッパ世界。当然、新世界 (the New World) はアメリカ。

【全訳例】アメリカが巨大であることは、アメリカが他国とはどういうわけか違っていて、旧世界に降りかかることになっている運命とは別の運命がアメリカ人のために用意されているという信念を生んでいる。

この英文のもう1つのポイントは there is reserved another destiny の訳出なのですが、これは第9日目です。やった there actually occurred a series of events which ~ と全く同じ「完全逆転型の倒置」だと気がついた？だって、「主語+動詞+文末副詞」の主語が長くなった場合、順序を完全に逆にして「文末副詞+動詞+主語」にしたよね！ここでも全く同じことが起こっています。

another destiny from that	is reserved	there
主	どうした	

which is to befall the Old World

【全訳例】旧世界 (ヨーロッパ世界) に降りかかるそれ (運命) とは違う運命が、そこ (アメリカ) には用意されている。

There is ~ が出てきたら、この英文が完全逆転型だと思って読まなければいけません。そして There is ~ の次にはいつも名詞が出てくるとは限らないのですよ！ is reserved は受け身形で、2語で1つの動詞扱いであることに注意してください。青い部分が全部主語ですから、当然 E T 型の頭でっかちな主語です。それを関取型の安定した英文にするためには、there から全く逆に英文を並べ直す「完全逆転型」を使うのでしたね！